「戦争に翻弄された母」

坪井　和代　（８３歳）

戦争が終わり７０年が過ぎた。傘寿（８０歳）を過ぎた私が現在までの記憶をたどり私と弟２人を育ててくれた母のことを記してみたい。母は特養施設でお世話になり、９５歳で、亡くなった。母を思うといつも涙がにじんでくる。

母は、１８歳で農家の次男であった父のもとに嫁いできた。その後、満蒙開拓団として両親が私を連れて満州に渡ったのである。その後、私が学齢となり、実家の祖母のもとに預けられ、母は生まれた弟を連れ、再び満州に旅立った。私を残しての渡満には心痛むものがあったと思われる。その後戦局が激しくなり、父は徴用され軍隊へ。

祖母は預かった私を一生懸命育ててくれた。私が国民学校２年の時終戦を迎えた。いつの日だったか父の戦死の知らせが届いた。祖母はその日から何日も何日も夜眠ることができず、本を読んだりして悲しみをまぎらわせていた様子だった。

私が４年生の冬のある日、急に玄関に２人の弟を連れた母が着の身着のままの哀れな姿で帰ってきた。弟は４歳と２歳で畳の上に２人とも寝させられ、ほとんど身動きもできないくらい痩せこけていた。母、弟の３人とも栄養失調となっていたのである。

母はしばらくして満州から引き揚げてくる時のことをボツボツ話してくれた。

開拓団として暮らしていたのも束の間、戦況が悪化するにつれ現地の男性は悉く徴兵され戦地へ赴くこととなり、女子供のみがその村に残された。３人目の子を妊娠していた母は、弟と身重の体で暮らすことになった。その後、間もなくして終戦となり、村をあげて引き揚げることとなった。それからはどうしても日本へ帰ろうという気持ちのみで、ソ連軍の襲撃をすり抜け、村人こぞって歩いて朝鮮の方向に進んだそうだ。途中、母は産気づき倉庫のような所で２人目の弟を出産した。同行していた女性たちがみんなで助けてくれたとか。

２人の子供を連れて帰る途中、中国の人たちに子どもを置いていくように言われたが、何とかして日本に連れ帰ろうと必死の覚悟で断った。やっと日本に着いた長崎沖の船中で疫病が流行し、何ヶ月も上陸できなかったとか。やっとの思いで実家にたどり着くことができたのだ。

父は３３才で戦死。その時は母２８才であった。帰郷した母は虚弱な二人の弟と１０才の私を祖母と二人で育てていかねばならない。またまた生活と子育てのために必死で働くことになったのだ。少しの農地だったが、女手一人の農作業は大変きつかったようだ。農業だけでは暮らしが大変で小さな雑貨店も始め、祖母とともに昼夜問わず黙々と働いていた。

私達子供三人はやがて自立、母は子育てを終えた。その頃は母の足腰は痛み始

め、やがて腰は二つに折れ曲がってしまった。

　引き揚げ中にやっとの思いで出産して連れ帰った次男に事故で先立たれた。悲しみはいつまでも続いた。

　施設で最期を迎えた母、私が帰省して会いに行ってもだんだん会話もできなくなっていた。苦労続きだった母に感謝の言葉も届かなくなってしまった。互いに心が通じ合える間にありがとうの気持ちをもっと伝えたかった。それが今になっても悔やまれてならない。